2-3_文化財建造物の復原を伴う修理工事事例（再築、部分復原含む）

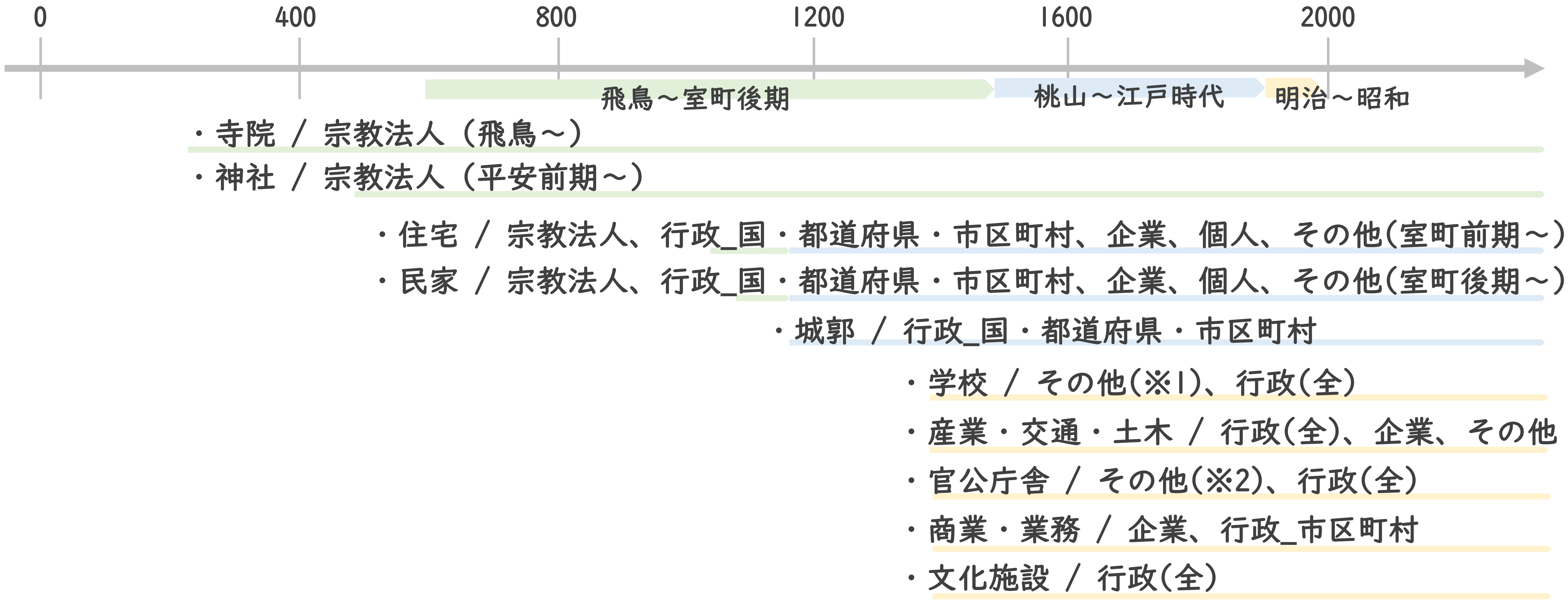
・大報恩寺本堂

・箱木家住宅

・旧国立駅舎（再築）

・明治生命館

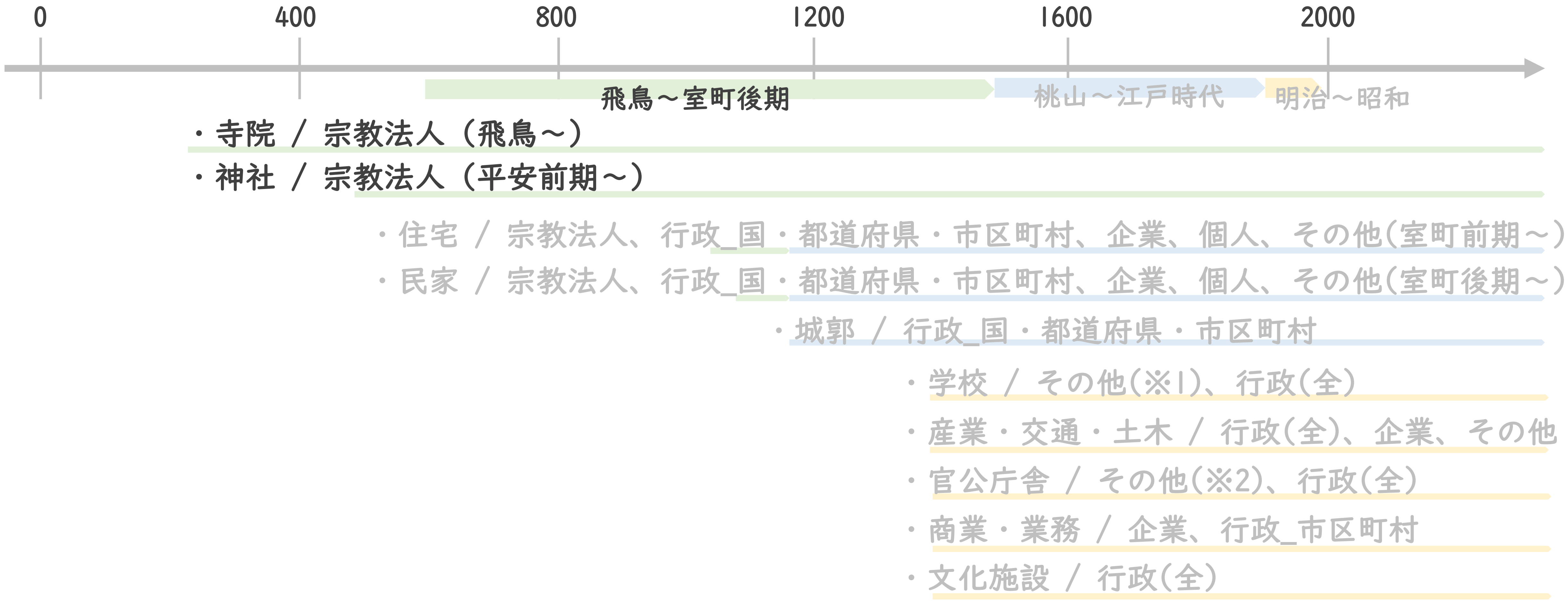
重要文化財建造物の遺構年代・用途・所有者



※1 その他：国立大学、学校法人

※2 その他：公益財団法人

重要文化財建造物の遺構年代・用途・所有者



※1 その他：国立大学、学校法人

※2 その他：公益財団法人

大報恩寺本堂（京都府）- 修理工事における復原

大報恩寺本堂は安貞元年(1227)に建てられ、千本釈迦堂という名称でも知られる。応仁の乱の戦火を潜り抜けた貴重な建物で現在国宝に指定されている。

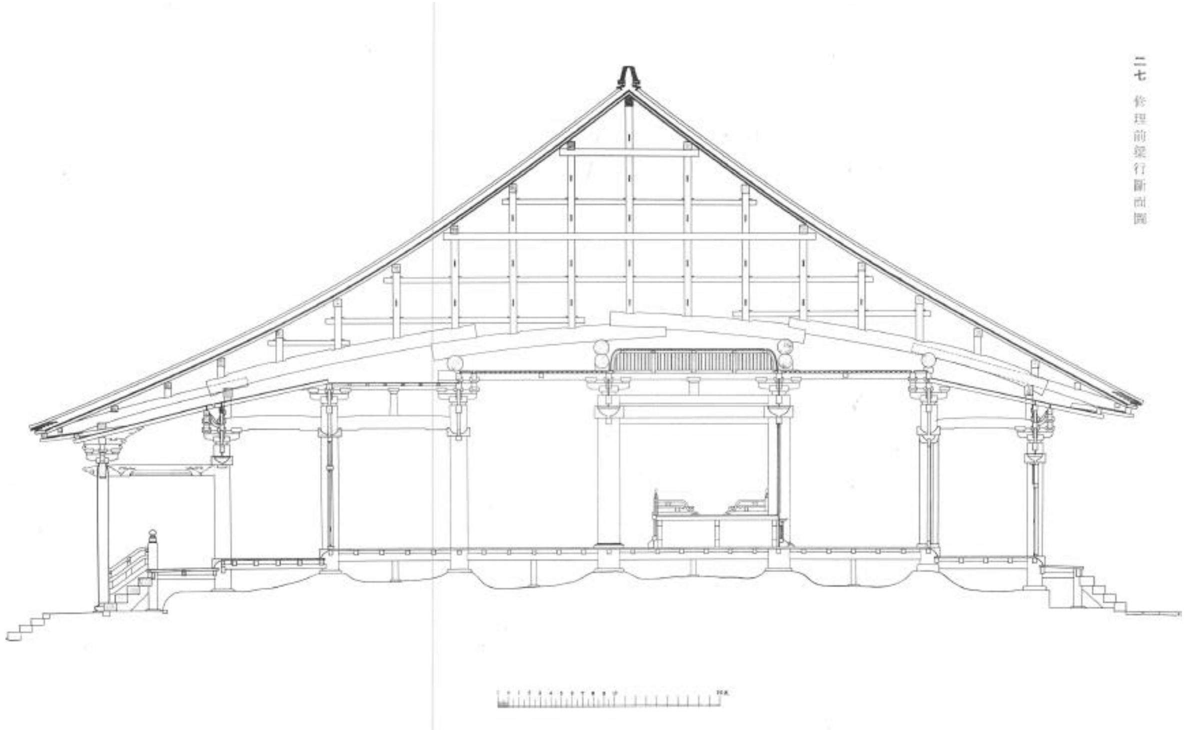
明治31年に修理を行う前の外観写真。瓦葺きの屋根で高さも現状のものよりも随分と高いことが分かる。

京都府教育庁文化財保護課『国宝大報恩寺本堂修理工事報告書』1954年

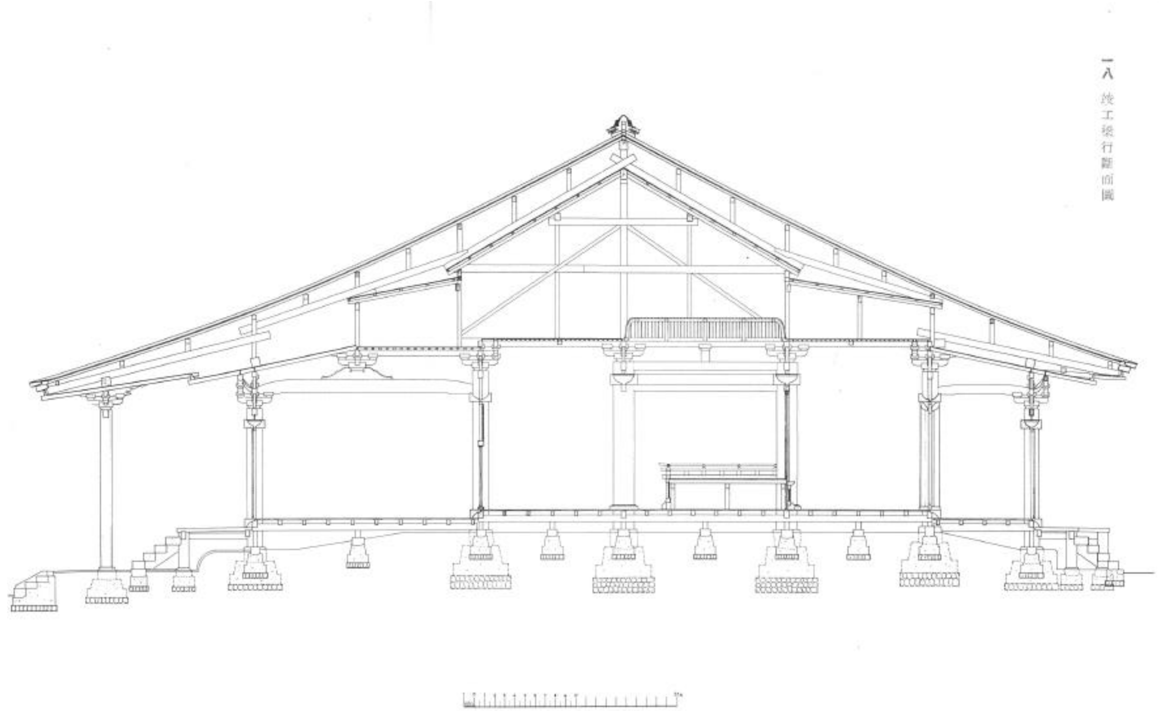
修理前の内観写真

京都府教育庁文化財保護課『国宝大報恩寺本堂修理工事報告書』1954年

現在の内観写真



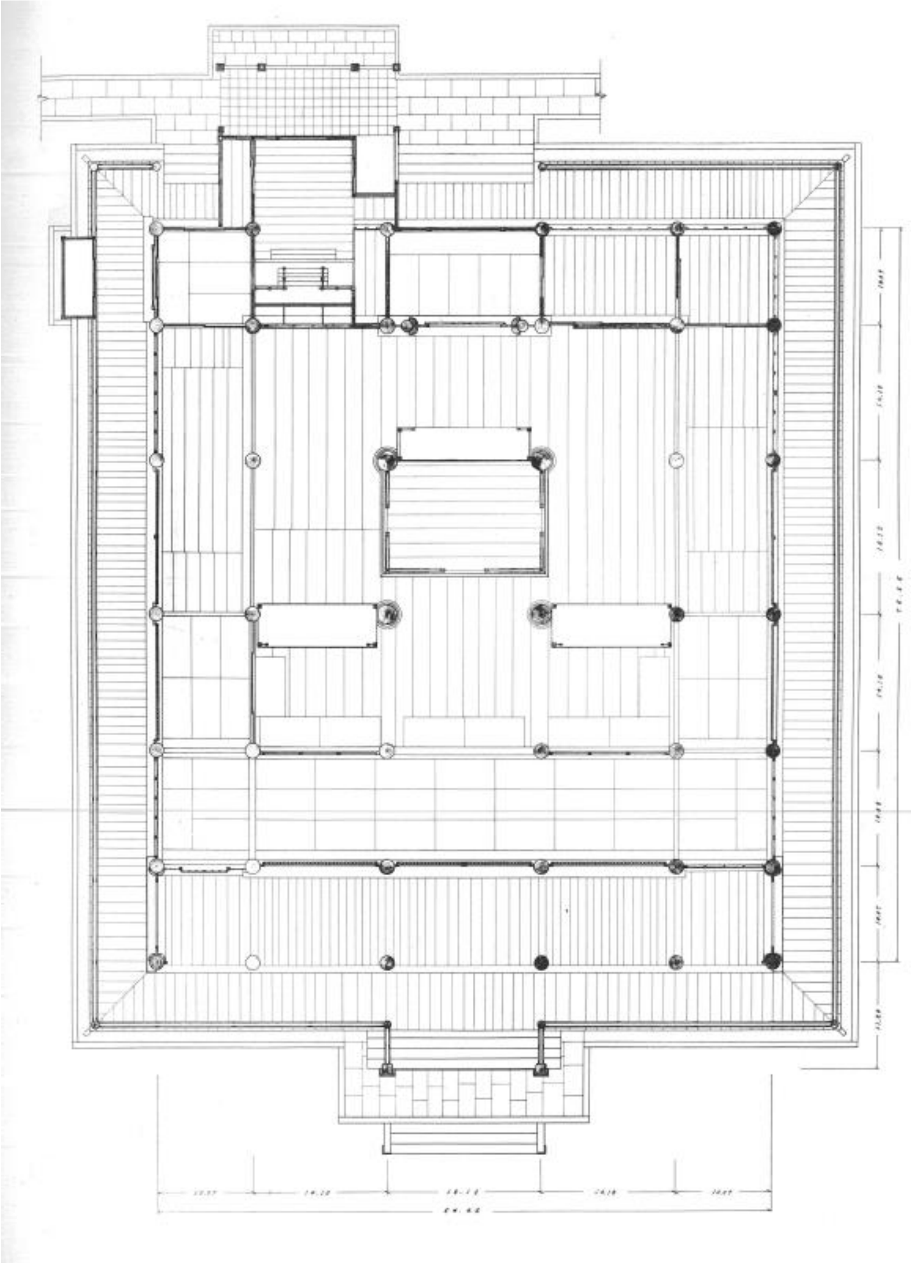
断面図【修理工事前】



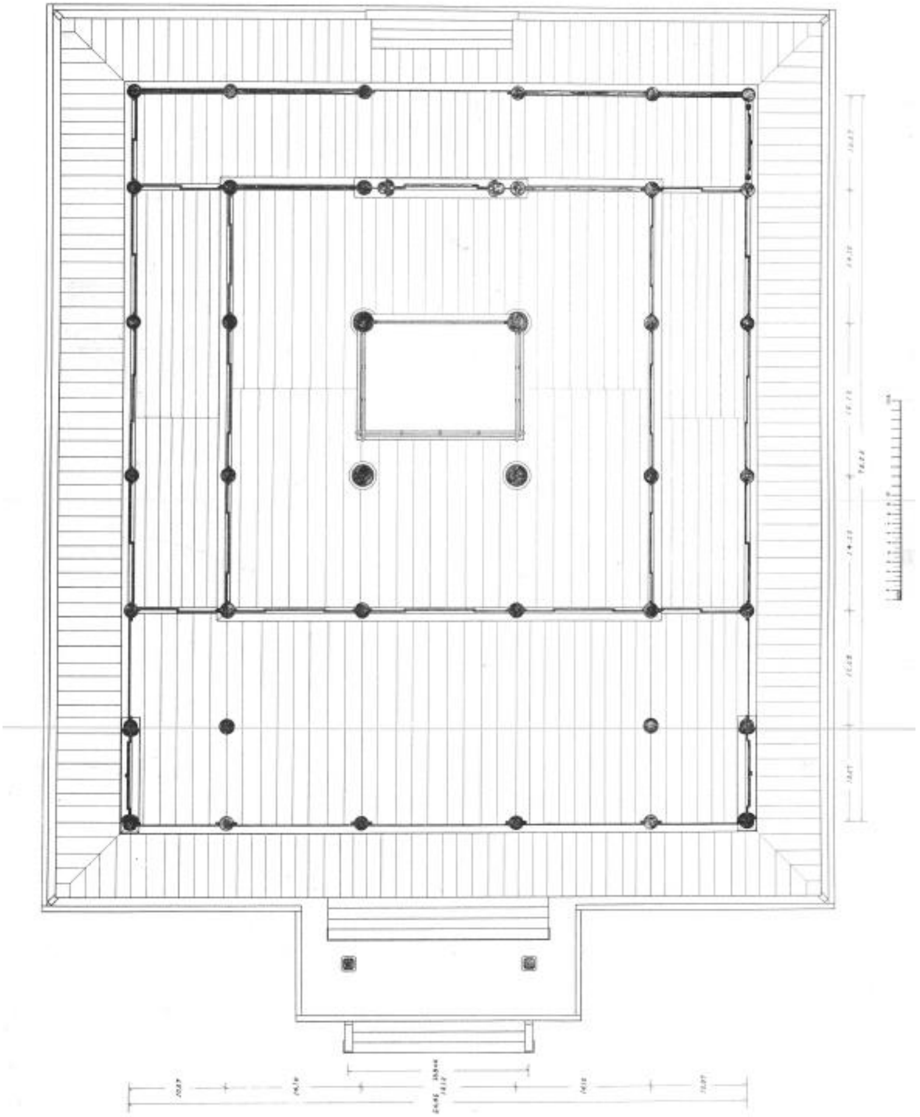
断面図【修理工事後】

江戸時代に他の建物の廃材を利用して変更されていた小屋組を元の架構に、本瓦葺を檜皮葺に、そして創建時の姿に復原された。小屋組みのような見えない部分まで復原するという考えを定着させた事例

参考：『国宝大報恩寺本堂修理工事報告書』1954

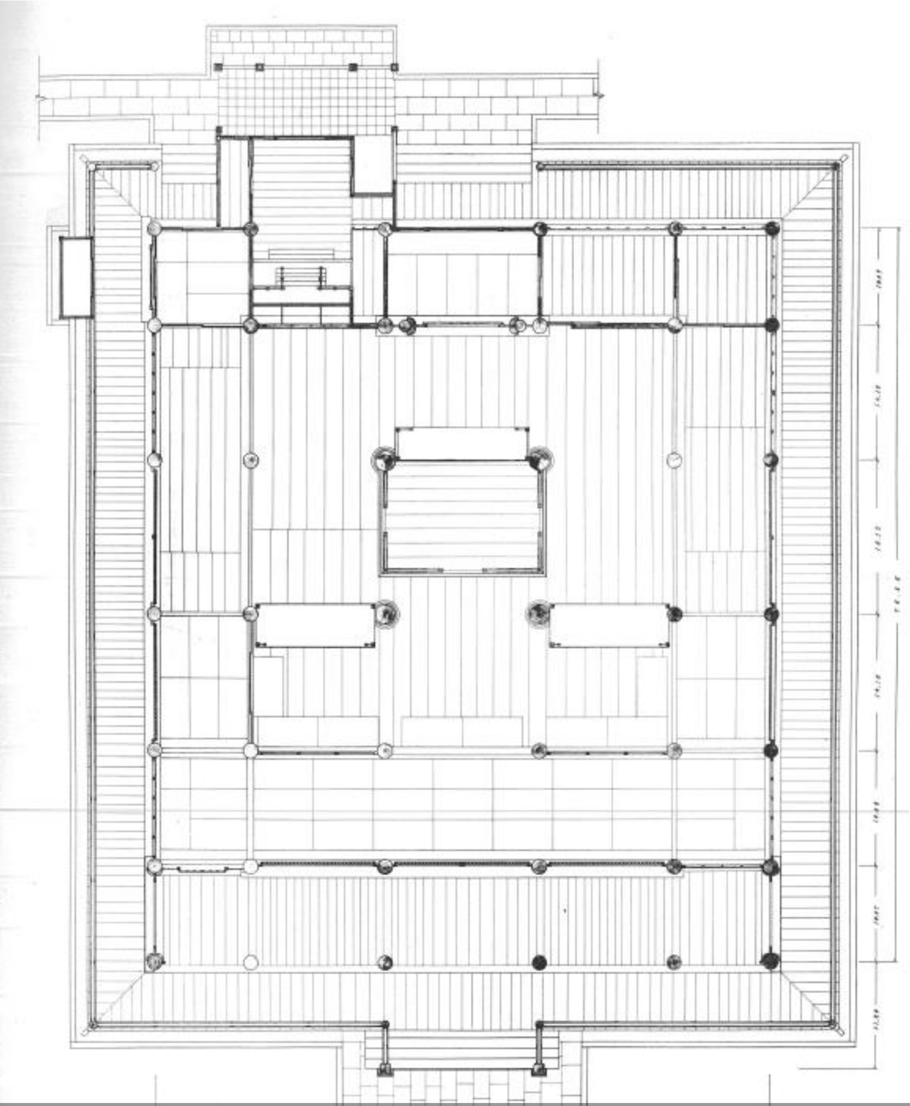


平面図【修理工事前】

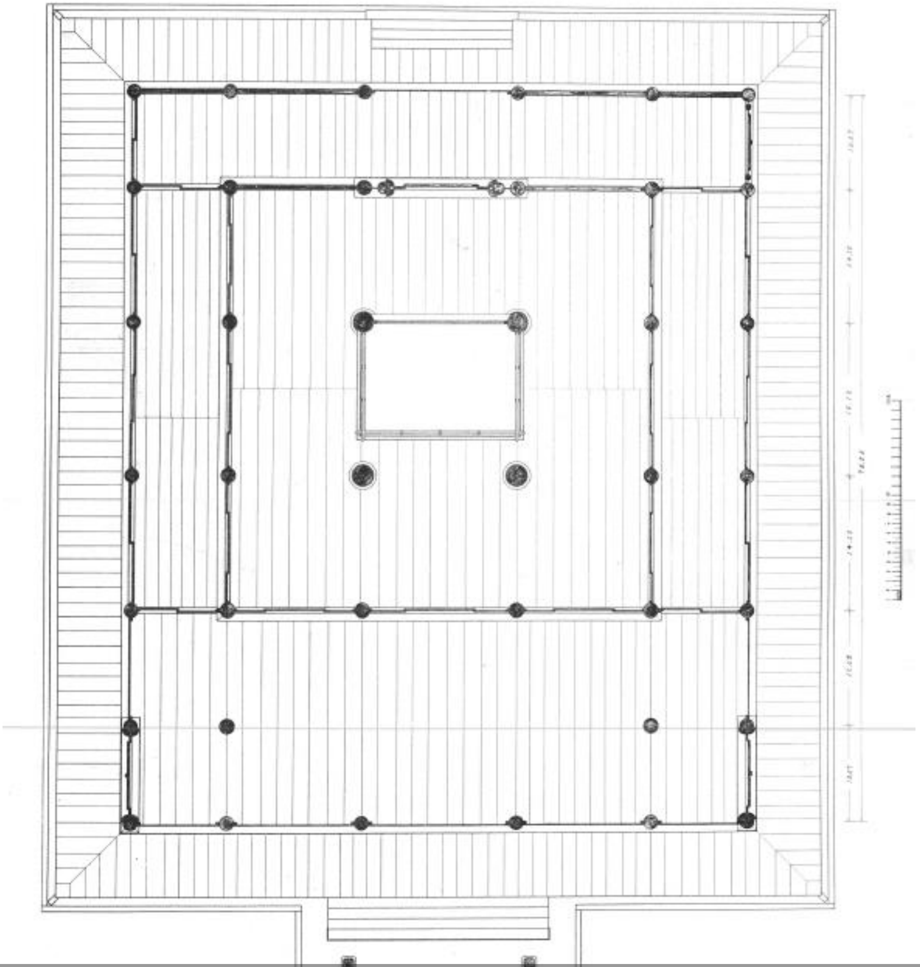


平面図【修理工事後】

参考：『国宝大報恩寺本堂修理工事報告書』1949



平面図【修理工事前】

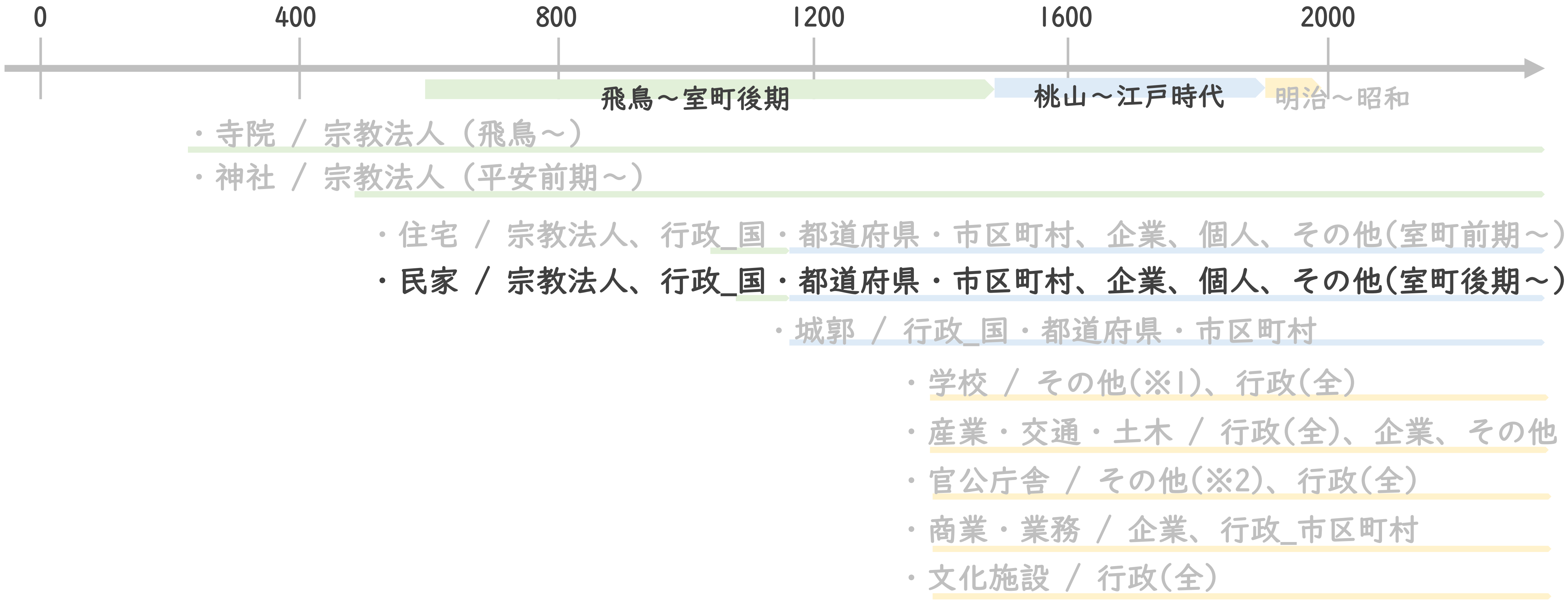


平面図【修理工事後】

一間四面の仏堂の正面に、一間の礼堂が付き、四周に庇がめぐる中世の本堂建築。
修理後は、外陣に追加されていた2本の柱を取り除かれ、背面に中世に設けられた仏壇がもとの状態に復原された。
また後戸背面両脇間にも厨子が設けられ背面から礼拝されていた痕跡が、それも取り払われた。現在でも創建されてからの歴史そのものを相対的に評価すべきではないかという議論もあり、非常に難しいところである。

参考：『国宝大報恩寺本堂修理工事報告書』1954

重要文化財建造物の遺構年代・用途・所有者



※1 その他：国立大学、学校法人

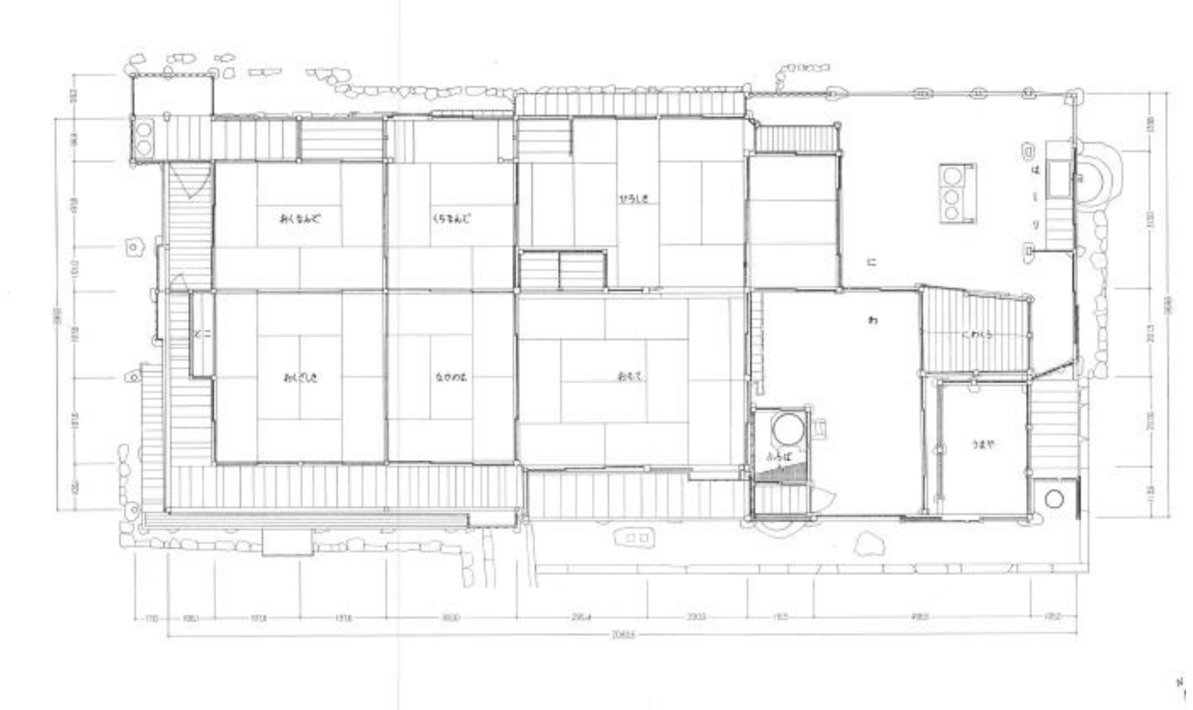
※2 その他：公益財団法人

箱木家住宅[千年家]（兵庫県）– 復原を伴う修理工事

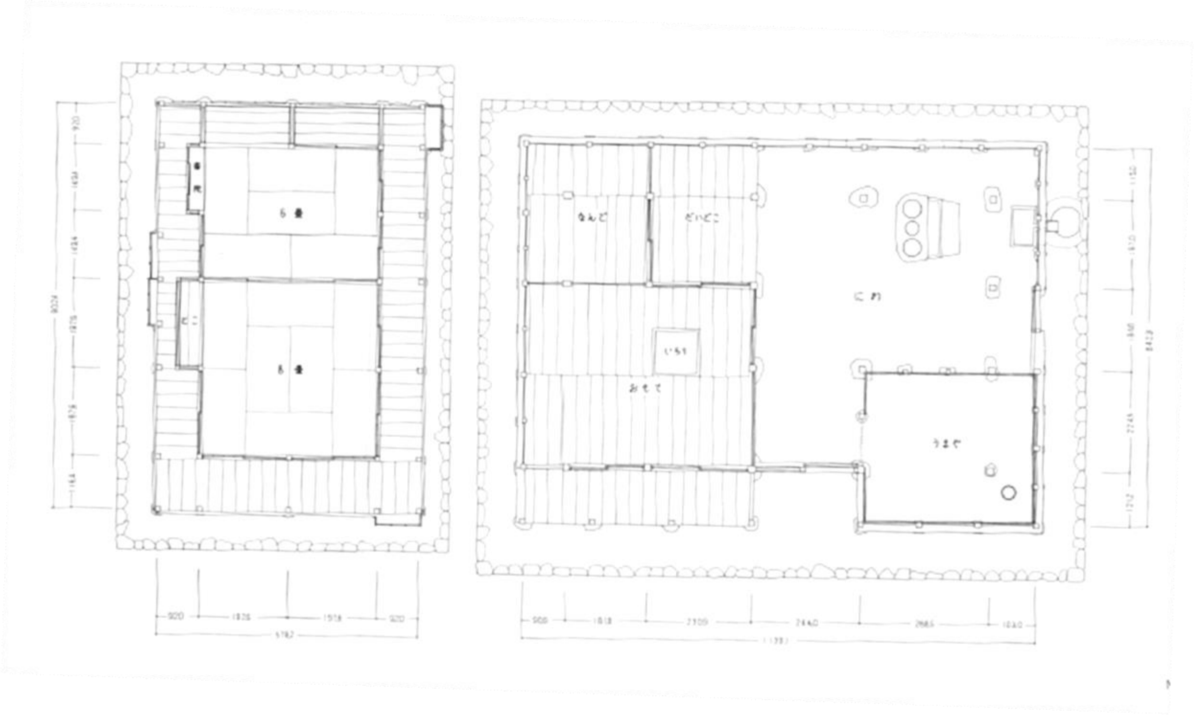
箱木家住宅は室町時代後期に建てられたとされる現存最古の農家で、当該敷地が呑田ダムの建設地となり、昭和42年に重要文化財化し、昭和52年に移築保存された。

もともと主屋と座敷が一体となっていたが、調査の結果、主屋と座敷をそれぞれ独立した建物として復原された。

財団法人 文化財建造物保存技術協会『重要文化財 箱木家住宅（千年家）保存修理工事報告書』1979年



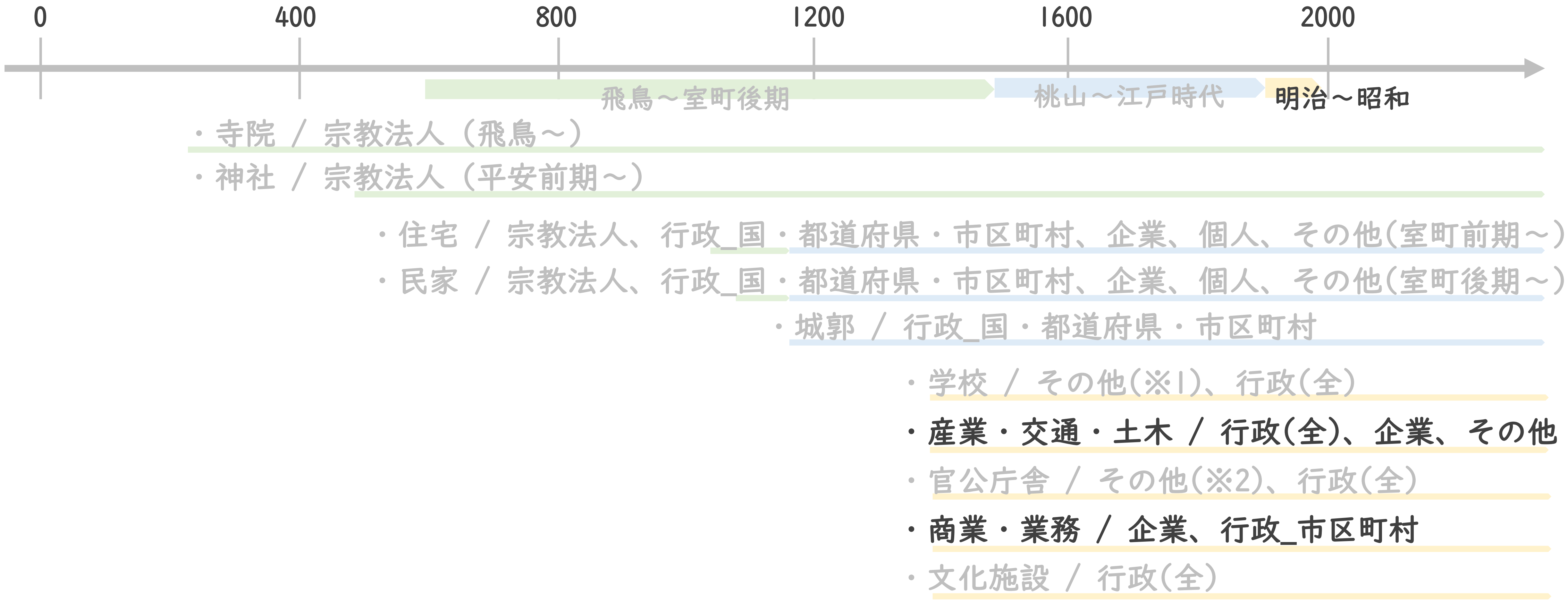
平面図【修理工事前】



平面図【修理工事後】

参考：『箱木家住宅（千年家）保存修理工事報告書』1979

重要文化財建造物の遺構年代・用途・所有者



※1 その他：国立大学、学校法人

※2 その他：公益財団法人

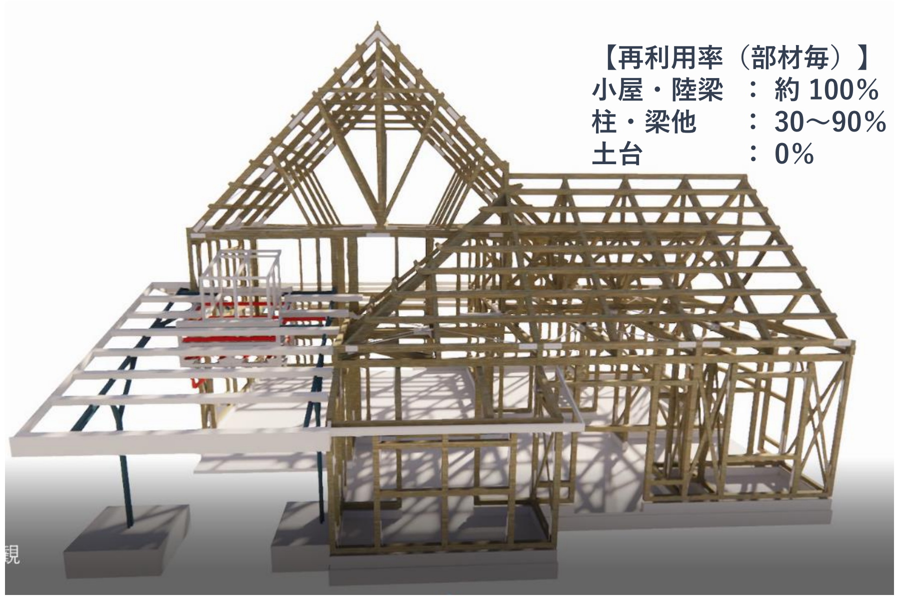
国立駅舎（東京都）－ 再築工事における復原　設計・施工：竹中工務店

1925年に「請願駅」として建設された旧国立駅舎の再築した事例。2006年に国立市指定有形文化財となったのち、JRの高架化事業の支障になることを理由に丁寧に分解され、その保管部材を用いて再築させたプロジェクト。

大正期の木造駅舎として貴重なものであり、意匠的には外観の三角屋根、半円アーチ窓等が、構造的にはキングポスト・トラスが採用されている点が文化財的価値とされている

※国立音楽大学所蔵

多目的室（旧広間）

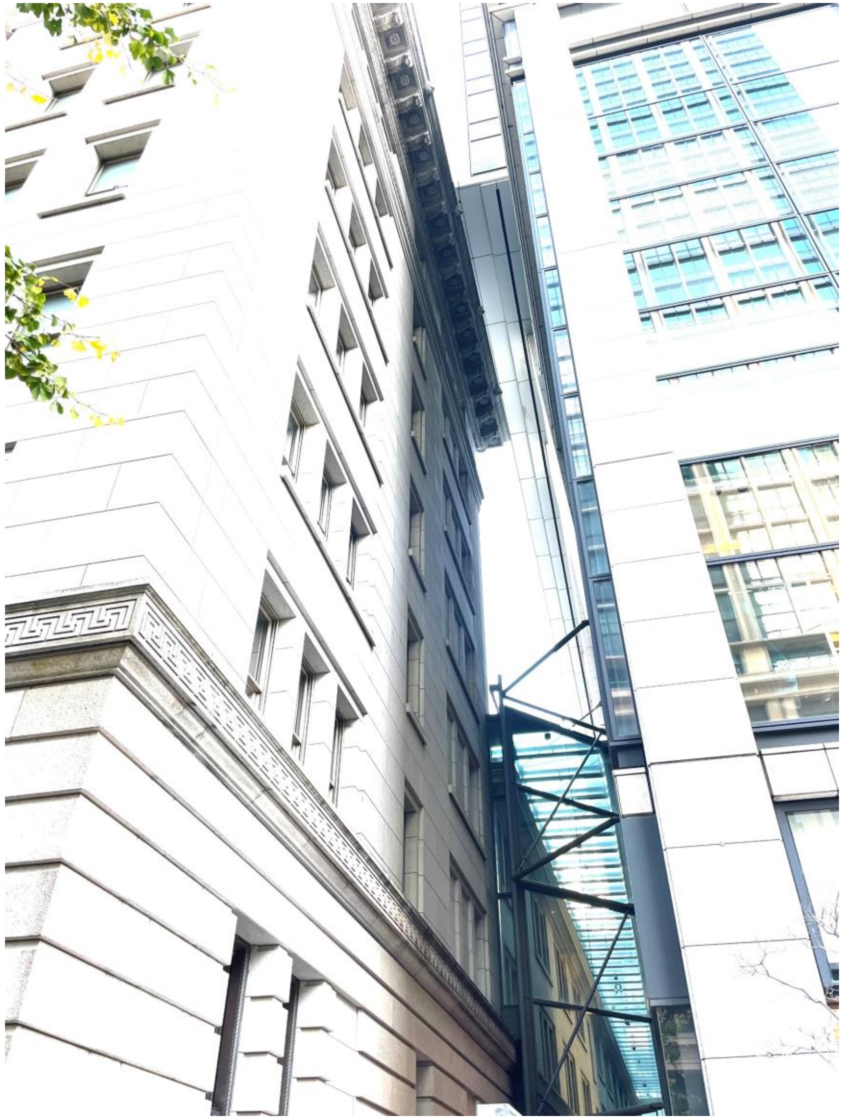


観光案内室（旧出札室）

展示室（旧小手荷物預所）

再築時の復原設計として、創建当初の部材を可能な限り再利用すること、再築建築物として創建当初の意匠を優先することを関係者間（国立市、アドバイザー）で共有し、さらに復原設計の方針としては、当初意匠の復原だけでなく現代要望の空調サイネージ等の機能付加を行った点に大きな特徴がある

明治生命館（東京都）－ 改修工事（設計・施工：竹中工務店）における外壁復原



創建時東側外観

解体時東側外観

アモイでの検査状況

コーニス部のモックアップ

前頁外観写真の反対側にあたる東面の復原した外壁（上左写真）。昭和43年に増築のために解体された東側の外壁部分を、2006年の改修工事の際に過去の写真や図を基に、専門家の協力を得て復原図を制作し、最終的には残っている部分の実測により割付寸法を割り出した。外壁の石は岡山県の北木島産の花崗岩を使い、彫刻はアモイにて実施。皇居側の正面の彫刻をFRPにて型取りした石膏模型をアモイに送り、見本として利用した。